

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	腫瘍制御科学領域 消化器外科学教育研究分野 氏名 岡野健介
指導教授氏名	袴田健一
論文審査担当者	主 査 黒瀬 顕 副 査 水上浩哉, 副 査 佐藤 温
(論文題目) Impact of the histological phenotype of extrahepatic bile duct carcinoma (肝外胆管癌における組織学的表現型の影響)	
(論文審査の要旨) 肝外胆管癌では近年、膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) と類似した分類が提唱されている。その理由として IPMN では形態、粘液形質および臨床病理学的特徴が相関することが挙げられるが、現在まで肝外胆管癌の新たな分類と予後との相関は明らかにされていない。そこで肝外胆管癌において、組織学的類似性に基づく組織型と粘液形質を含めた臨床病理学的特徴との相関を検討した。 肉眼的根治切除が行われた肝外胆管癌 99 例を用い、組織学的に biliary type (BT) と metaplastic type (MT) に分け、それぞれの粘液形質を免疫組織化学的染色で調べ、さらに臨床病理学的因子と比較した。 その結果、肝外胆管癌は BT 群 45 例と MT 群 38 例に分けられた。粘液形質は BT 群では MUC1 の、MT 群では MUC5AC および MUC6 の発現がそれぞれ有意に高かった。単変量解析では無病生存期間、全生存期間ともに MT 群に比べ BT 群の方が有意に低く、さらに分化度の低さ、リンパ節転移陽性、顕著な静脈侵襲、および顕著な神経周囲侵襲はそれぞれ予後不良であることと相関していた。しかし多変量解析で予後不良との相関がみられたのはリンパ節転移陽性のみであった。ほか、単変量解析では性、年齢、腫瘍発生部位、腫瘍サイズ、リンパ管侵襲等と予後との関係はみられなかった。 以上から肝外胆管癌において、BT 群は MT 群と比べて予後不良である可能性と、その原因として、BT に高頻度にみられる MUC1 発現やリンパ節転移の生じやすさが関与している可能性が示唆された。 本研究は肝外胆管癌の新たな組織学的分類と粘液形質との関係、および予後との関係を調べ BT 群の予後不良の可能性を指摘した最初の報告であり、今後の肝外胆管癌の治療方針の選択や、術中迅速診断および手術摘出検体診断において評価すべき病理学的注目点を指摘したもので、今後の肝外胆管癌の治療に益するところ大であり、学位授与に値する。	
公表雑誌等名	Molecular and Clinical Oncology に掲載済み